

なす

ナス科：インド東部

栽培暦

月	2			3			4			5			6			7			8			9			10		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
主 な 作 業																											
	台木 下 ガル バム ビ 播種	穂木 播種	第一 回 移植	接木 ・ 鉢 上げ	定植	整枝	支柱 立て	マ ル チ 除 去	敷 き わ ら め ・	収 穫	追 肥																

■栽培のポイント

1. 連作する場合は接ぎ木苗を用いる。(接ぎ木 P305 参照)
2. 排水の良いほ場を選ぶ。
3. 草勢を判断。強い場合は摘葉、弱い場合は追肥で対応。

■品種・種子量 真仙中長、薄皮丸なす、民田、くろべえ、千両2号。種子量はa 当り 5 ml。

■育苗

播種 20～25℃の温水に1昼夜浸してから6 cm間隔にうすく条播きする。覆土は種子が隠れる程度にうすく行い、新聞紙を乗せて乾燥を防ぐ。

床温 発芽までは昼間30℃、夜間20℃の変温とする。発芽後は地温20℃、気温は日中25℃、夜間5～18℃とする。発芽後は子葉が重ならない程度に間引きする。

移植 1回目は本葉1.5～2枚時(播種後20～25日)、9×9 cmに移植する。移植床の温度は活着するまでやや高めの25℃に管理する。2回目は本葉4～5枚時12 cmのポリポットに鉢上げする。

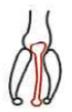
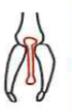
■定植準備

施肥 深根性なので深耕し有機物を十分施すとともにpH 6～6.5になるよう苦土石灰等を施す。
ポリマルチ 地温を高めて活着を促進するため、定植7日前にポリフィルムでマルチしておく。

施肥例

(a 当り)

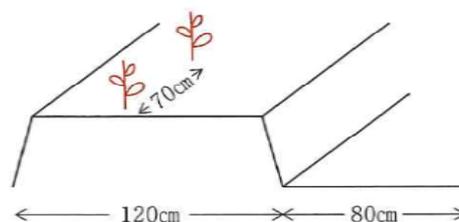
肥料名	基肥	追肥	備考
完熟堆肥	400kg	—kg	成分量
苦土石灰	10	—	窒素 3.2kg
有機入 I B ホーソそさい 1 号	15	—	燐酸 3.1 加里 2.8
過燐酸石灰	10	—	
燐硝安加里 S 604	—	8	

株の栄養状態と花の型態			
	追肥	計画的な追肥で良い。	追肥が必要。

うねつくり

■定植 第1花開花の始めの苗が適期苗である。

地温 16℃以上になったら定植する。定植後は風による倒伏を防ぐため仮り支柱を立て、後に本支柱を立てて誘引する。



■定植後の管理

整枝 主枝と第1花の下の側枝2本を伸ばし、残りのわき芽は早めに摘除し、いわゆる3本仕立にする。その後は放任でも良いが、内部が混みあってくると果実の着果不良や病害発生の原因となるので、内側の枝や勢いの弱い枝を適宜間引きする。また、老化した葉も摘葉し、下部の内部への通風と採光に努める。

敷きわら・かん水 6月下旬頃になると地温も高くなるのでポリマルチを除去し、うねと通路に敷きわらをする。梅雨明け後の乾燥期には適宜かん水する。

追肥 健全な株は花の咲いている先に葉が3~5枚くらい展開していると長花柱花（雌しべが雄しべよりも上に出ている）が多いが、草勢が衰えると短花柱花が多くなるので上記の略図を参照して、追肥等は早目に行う。

■病虫害防除

病害では疫病、褐紋病に留意し、排水を徹底して過湿を避ける。

害虫ではアブラムシ、特に高温乾燥時は、なすのへたを褐変化するホコリダニやハダニに留意し、発生初期に防除する。

青枯病、半身萎ちょう病、半枯病は連作による土壌病害なので連作を避け、複合耐病性台木に接ぎ木する。

■収穫・収量 定植1か月後から始まり10月上旬、収量 a 当り 300~400 kg。